
(株) ふない不動産

やとふた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

(株) ふない不動産

【Nコード】

N4723S

【作者名】

やとぶた

【あらすじ】

目覚めると幼女になっていた29歳崖っぷち女。プラス同僚達の異世界ライフ。

果たして元の世界に戻るのか？

1 (前書き)

はじめての作品になります。
更新は遅いかもかもしれません。

1

草の香りがする

それもむせかえりそうな程強い匂いだ。

おかしい

我が家には観葉植物はおろか花すら飾っていない（すぐ枯らしてしまうため）

重たすぎる瞼を無理矢理ひらき、寝汚い&超低血圧の私は過去にみないほどの勢いで眠りから覚醒した。

宮城翔子29歳女

今までの人生中で一番驚いたのは酔っ払って自宅のトイレで裸で寝ていたことだったが、目の前に広がる景色はそれを上回っている。

どこまでも続く草原と寝ている上司の姿。

頭の中は大混乱。

「…なんでやねん」

思わず地がでてしまった。

パニック中の頭の中では

なんでやねん

が大合唱中である。

とりあえず寝ている上司を起こしにかかる。

「草野さん、起きて下さい」

ゆさゆさ……

…起きない

「起きて下さい！非常事態なんです！」

ゆっさゆっさ……

…起きない

「起きて下さいゆーてるんですけどー！起きひんかったらしばきまわしますよ」

胸の上で両手を組んで、まるで天に召された方の様な寝方で熟睡しております。

アーメン

じゃなくて、本気で叩き起こす事にします。

とりあえず頬を渾身の力を込めてつねってみたら飛び起きました。

「なんですか？人が気持ち良く寝てるのに…。痛すぎますけど。

で、ここどこなんですか。お嬢ちゃん誰なんですか。

寝ている人様の顔をつねるなんて…」

…おい！

「誰って、どーみても宮城でしょーよ！宮城翔子です！どこか私に分かるわけじゃないじゃないですかー！」

はて…？と首を傾げる上司。

つられて私も首を傾げる。

そして次の言葉に固まった。

「僕の知ってる宮城さんて、もう少し歳くっってたと思うけど、？宮城さんの親戚の子？」

草野さんは寝ぼけているに違いない。

パニック中の脳みそに更なる混乱を招く発言をしやがる。

「寝ぼけるのも大概にしてくれませんか？私大混乱中なんですけど！これ社員総出のドッキリか何かですか？社長達みんなないし！」「なんかだんだん腹が立ってきた。

目の前の上司は馬鹿みたいにポカーンと口を開けてこちらを見ている。

「え？ホントに宮さん…？なんでそんな事になっちゃってるの？んで、ここどこ？」

いつも飄々していて冷静な草野さんの声が震えてる。

「みんなは？なんで外に？それよりもなんで宮さんが子供に？」

頭の良い人でもパニックに陥るとこうなるのか…と私は逆に冷静になってきた。

子供か…

私子供になっちゃってるのか…。

って子供？！

ふと自分を見下ろすとダボダボのパーカーに着られている。はいていたはずのジーンズはなく、靴すらも履いていない。

自分の両手を見ると、明らかに小さな子供の手。

「あ…なん、なんで？こ…れ何？どーなってん…の？」

パーンと何かがはじけ、私は意識を手放した。

思えば短い春でした…。

私はいわゆるヘツイてない女である。

物凄く不運な訳ではなかったが、何故か少し運が悪い。

目当ての店に行くと年中無休の店が臨時休業なんてことは高確率で起きるし、良く晴れていたはずの天気は私が外に出ると雨が降り出す…といった具合にビミョーについてないのだ。

そんな私も29歳になり、永久就職の予定もない為考えに考え思い切って転職することにした。

一般事務の仕事を辞め、努力の未取得した宅建資格を活かすべく不動産業界へとダイブした。

入社して半年。

何とか慣れてきた頃社員全員で社員旅行に行くことになったのだ。

美味しいご飯に楽しい観光地。

温泉サイコッ！！

この会社で転職してからツイてるかも… と思ってたけど、自称ツイてない女である私が急にツキ始める訳がない。

目の前の状況から現実逃避を図っていた私だが、いつまでも目をそらしてはいられない。

「あんたは何でまた寝てるんですかー！
起きろー！」

そう、気絶から目覚めたら両手を胸の上で組み熟睡している上司から、目をそらしてはいられない…現実を見なくては…

4 (前書き)

今回から少し長めです。

「いや、寝るつもりはなかったんだよ？ 宮さんが白目向いて気絶して、どーしたもんかと考えてたら…」

寝てた上司を再度つねりあげ起こすと、ウダウダと言い訳を始めた。上司の言い分を信じるならば、頭と身体がはちきれそうに痛くて、気絶したそうだ。

…はちきれてしまえば良かったのに。

「宮さん物騒な事考えてない？」

「っていうかホントに宮さんですよねえ？」

「まだ言いますか？」

宮城翔子、29歳兵庫県出身で5人兄弟の次女。ついでに彼氏いない！好きなお酒は焼酎お湯割り！まだいっとききます？」

一気にまくしたてる。

不安で不安で泣きそうだ。

「すみマセンでした…」

自分の姿を鏡で確認したわけではないので何とも言えないが、小さな身体を見下ろす。

やっぱり泣きそうになってきた。

大声で泣き喚いてしまいたいが、ぐっところえる。

29歳！！子供じゃないんだし、泣くのは後だ。

とりあえずは状況把握をしないと、分かることも分からなくなってしまう。

そう思って顔を上げると、何か考えこんでいる上司。

落ち着いて考えるとちゃんと周りも見えてくる。

スッキリと短めに整えられた髪に鋭い目元。

無駄に大人の色気を振りまいていた顔は爽やかで、肌もツヤツヤ…
うっすらあった皮肉気な口元のシワもなく、ツルンツルンのプリッ
プリ。

爽やか…？

ツヤツヤ…？

ツルンツルンで尚且つプリップリ…？？？

落ち着いて考えるってのは大切な事だ。一旦呼吸を整えて、周りを
ゆっくり見渡すと気づかなかった新発見がある。

…良しも悪しも。

「草野さん……」

落ち着いて考えようと決意したばかりなのに、またまた頭で混乱が
始まった。

「あの…草野さん…」

…ツルンツルンでプリップリの爽やかボーイになっちゃってる感じ
ですけど…」

「……………はい？」

口をパッカーンと開けてマヌケ面した上司と見つめ合うこと数十秒。

「イヤイヤイヤ！宮さん。そんなことがあるわけ…」

無言で上司を見つめる。

ヤッパリこうなんというか若い。

「冗談でしょ？」

とか「マジで?!」とかブツブツ言っているが、私のように子供にはなっていないし、すぐに「草野さん」と分かるからいいじゃないかと思ってしまう。

お互い鏡を見るまでは実感も納得も出来ないだろう。

「とりあえず現状把握です。」

いつも私に言ってるじゃないですか。

片付けるべき問題が山積みの場合は、まず何を優先すべきか考えろって。」

途端にいつものクールな表情が戻ってくる。

上司は我が社のまとめ役だ。

不動産のみならず、様々な専門知識をもっている為、頼られる事も多くトラブルが発生すると困った時の草野さん頼みといった感じで、そのたびに聞かされてきた。

「分からない事はとりあえず置いときましょう。」

草野さん、目が覚める前の事、どこまで覚えてます？

…私達、事故にあったんですよね？」

「そう、山道を走っててバスが横転して…崖から落ちていった…と思いますけど…。」

私達は旅行帰りのバスの中で事故にあったのだ。

雪で路面が滑りやすくなっていたのか、細い山道を通っていた時に「あっ」

と思ったのは覚えてる。

後は起きたら、なーんもない所に寝っ転がっていたという訳だ。

「でもおかしいですよね？」

窓から見た景色じゃ木は沢山あったけど、こんな野原みたいな所は見えなかったし。

何よりバスとかみんなは？

私と草野さんだけ、バスから放り出されたんですかね？」

…そして二人とも無傷で助かった。

奇跡だ…。

「とりあえず人を見つけないと。

宮さん、今何時？」

そう聞かれて腕時計を見ると12時を少し回ったところだった。

「12時過ぎですけど、草野さんって時計付けてないんですか」

「いつもは携帯で…」

「携帯！」

忘れてた！

やっぱり人間パニックになると駄目だ。

張り切って携帯を取り出したが…………

「駄目ですねえ…。完全に圏外です。宮さんののは？」

「私携帯カバンに入れてたんで…。ないんです。」

二人してがつくりとうなだれた。

やっぱりツイてない…。

イヤ、奇跡的に命は助かったんだからツイてるのか？

俯いていた私の頭の上から優しい声が降ってくる。

「場所を移せばきつとつながる所があるはずです。日が暮れるまでにどうにかしないと…。とりあえず歩きましょうか。」

そう言って立ち上がった草野さんは、いつもの頼りになる「草野正臣」に完全に戻っていた。

水…水…水……………。水が野みたい。

私達は森に続くであろう林を背に歩き出した。森に入って遭難でもしたらシャレにならない。

…もう充分シャレになんない事態だし。これ以上はご免被りたい。

歩き出してから二人とも無言だ。

色々考え過ぎて言葉にならない。

歩き続けて早2時間。喉もカラカラだ。

「宮さん、少し休みませんか？」

草野さんも同じ気持ちだったのだろう。

こちらを見る顔には『疲れた』と書いてある。顔を見合わせて乾いた笑いを交わす。

「考えてたんですけど…」

木陰に腰を下ろしながら草野さんが話します。

「おかしいと思いませんか？」

考えれば考えるほどそう思うんです。

いくら田舎の方に来ていたとはいえ、家や田んぼすらないなんて。

バスに乗ってた時は電柱だって普通にありました。

いくらバスから投げ出されたとはいえ、こんなに何も無い所なんてあると思います？」

確かに歩き始めて3時間たったが、見渡す限り木以外何もない草原が広がっているだけだ。

冷静に考えてなんて言っただけど、本当は考えたくなんかない。

おかしい事は分かってる。

でも深く考えるのも怖い。

「宮さん……………」

眉間にシワよってますよ？

ない脳味噌をフル回転させてもたかが知れてるので止めなさい。

そんなコワイ顔小さい時からしてるから、大きくなってヤンキーになるんですよ。」

…おい!!

「誰がヤンキーやねん!!」

思わずツツコミをいれてしまった……。

ムツとしたフリをしながら上司を見上げる。

上司は

「さすがヤンキーはツツコミも違いますね。

おおコワ……」

など言いながら笑っている。

「本当に失礼な人ですね…。

腹黒野郎……………」

最後の部分は小声だったのに、しっかり聞こえていたようだ。

わざとらしい笑みを浮かべながらジワジワ近づいてくる。

「人が気遣って元気を出させてあげようとしてるのにヒドい扱い……。

悪い言葉を使うお嬢ちゃんにはお仕置が必要ですねえ。何がいいかな…？唇で唇をふさい『申し訳御座いませんでしたー』」

コワイよこの人。

斜め上から過ぎる、完全セクハラ発言を大声で遮る。

からかわれてるのは分かっているのだが、いつもこのパターンだ。いい歳して赤くなる顔が恨めしい…。

上司の顔を見上げると、案の定ニヤついていた。

7 (前書き)

お久しぶりでございます

「宮さんの元気も出たところで、さっきの話だけど…」

「はあうげえ！」

頭に衝撃を受けそのまま倒れ込む。

目の前にキレイなお星様とドピンクのナニカ…

「なんですか？これ」

草野さんは、私を起こしながら片手にどピンクの塊を持つと

「痛っ！」

と言いながら地面に投げつけた。

どーやら噛まれたようだ。

（ふふ…ざまあ）

どーやら地面にころがる物体Xは生き物のようだ。

こちらをじっと見つめている。

つぶらな瞳に大きい口元からは小さなギザギザの歯が見える。ふわふわのどピンクの毛並み。

額と思わしき部分からは触角が生えており、先端は豆電球みたいなモノがついている。

なんだコレ…？アンコウの姿形に似たピンクの生物Xはまだこちらをじーっと見ていた。

8 (前書き)

お気に入りにして頂いている方がいてビックリしております。
有り難うございます。

見たこともない派手な色した生物？Xは、まだこちらをじっと見つめている。

翔子は思った。

……可愛い。

もともと、ちょっとブサ可愛いと称される生き物が好きなのである。

犬であればチワワやトイプードルよりも、間違いなくバグやブルテリア派だ。

……近づいて触ってみたい。

チラリと横の上司を見やると噛まれた手からは血が出ている。

結構凶暴なのか。

マヌケな顔からは窺えないが…。

「宮さん何ですかねえコレ？

病気とか持ってたなら嫌だなあ。

結構深く噛まれたんですけど。」

再度上司を見るとまだ血は止まらない様で少し焦った。

何か止血する物はないかとパーカーのポケットを探てみると、一応乙女？らしくハンカチがあったので生物Xを刺激しないように見つめ合ったまま、ゆっくり上司の所へ行き、傷口をみる。

…結構ガッツリ噛みつかれてるなあ。

縫わないとダメかも。

冷静に傷口をみながら止血する。

「上手いものですねえ。

私繊細なので傷口見てるだけで、倒れそうですよ。
いだっ！」

「やんちゃな弟が二人もいたので慣れてるんですよっと。
ああ、手は心臓より上に上げておいて下さい。」

憎まれ口を叩く元気はいっぱいありそうなので、最後にもう一度グツとキツく縛って止血完了。

：あのハンカチ、前いつ使ったか覚えてないなあ。：汚な！
まあ、旅行前にパーカーを洗濯したときに一緒にキレイになってるだろう。

今着てる服で傷口触るよりマシ！

ガッハッハと、乙女どころかどこの豪快なおっサンだってな具合に独りごち笑う翔子を手当てしてもらった手間、なんとも言えない表情でみる草野。

そして、あのドピンク生物Xは……………
まだこちらを見ている…。

8 (後書き)

まだまだ見えます。

9 (前書き)

ついにアレが…

ホントなんなんだろう…。

生物Xは見ているというかメンチ切ってる？てなぐらいの熱すぎる視線を送ってき続けている。

「ねえ宮さん、もうアレ放っておいて行きましょう。

僕早く病院行きたいですし、ここいてもしょうがないでしょ？」

そう…ですよねえ。ちょーっと触ったり撫でたり触ったり触ったりしたいけど…。

「宮さん？みくやくさくん？おい！そのオバサン」

「だれがババアだ？あ？まだ29歳ですけど！」

この腐れ色ボケオヤジがああ！

「おお！ヤンキー復活ですね。人がずっと呼びかけてるのに返事しないからですよ。そんなにアレ気になるんですか？」

コイツ…また人をヤンキー呼ばわり…。上司じゃなかったら3倍返しなのにい。

噛みつきたいのを我慢してこたえる。

「気になるっちゃあ気になります。

見たことない生き物ですし、さっき草野さんに噛みついたのだって、いきなり掴まれてビックリしたんじゃないですかね？若しくは若作

りのオッサンに驚いてつい…かもしれないですしね。」

「本当に失礼なヤンキーですね。でも僕今若返ってるんでしょう？
若作りじゃないじゃないですか。」

「アレ？ 凶星でしたね？ ウフフフフ」

二人でギャアギャア罵りあっているのをアレは……………見て……………
…見て…見て…食い入るように見て…

「いやゝん！ お嬢ちゃん可愛いじゃなくい。ちょゝタ・イ・プよお
ゝ」

！！！！！

しゃべった！！

……………明らかに男の裏声で…。

10（前書き）

ご無沙汰しております。

「ぶらぶら飛んでたら腕つつちやてえ！落ちたら男にわしづかみされて気分悪かったけどおゝ、こおゝんな可愛い娘に会えるなんてえ、アタシ！ラッキーだわん。」

おいおい、さっきまでの無言はどこ行った？

マシンガントークを繰り広げ始めた物体Xを横目で見ながら、上司と顔を見合わせた。

「宮さんアレなんだろ…僕には喋ってる様に聞こえるんだけど。血流しすぎて、幻聴が聞こえてるのかな？」

上司よ…気持ちは良く分かる…。

「幻聴だったら良かったんですけど、私にも喋ってる様に聞こえます…。」

しかも今流行りのオネエ系っぽいんですけど…。」

喋るど派手な物体X…。

「世界は広いんだねえ。」

こんな生き物初めて見た。」

「ええ、私も。」

上司がそう呟き、生返事を返したが…そんな訳はない事は、たぶんお互い分かってる。

そんな生き物がいたら、連日テレビのワイドショーで持ち切りだろう。

なおも

「あゝん。か・わ・ゆ・い・わゝん。

男が邪魔だけとおく。」

とまぐし立っているアレと少しずつ距離を取りながら、頭の中では、ヤバいぞ警報が鳴り響いていた。

じりじりと後退りし始めた私達だったが、アレの一言が私達の足を止めた。

「ちょっとおゝドコ行くのよおゝ。

だいたいアンタ達こゝんな所で何してんのお？

変な格好してるしいゝ。

あゝ喉かわいちゃったわあ。

お水飲も。」

そりゃそんだけ喋れば喉乾くだろ。

とツツコミたかったが、問題は最後の一言だ。

水を飲むと言って、何かブツブツ言った後、体を少し震わすとアレの前にコップが！

手品か何かの様に、いきなりコップが！

アレはコップに刺さったストローに吸い付いて、美味しそうに水を飲んでる。

みず…

水？！

「それ、ちょっとでいいから下さい！！」

水を飲んでるのが、喋る物体Xだろうが何だろうが構わない。とにかく水、いいから水、何はともあれ水が飲みたいのだ。

「おゝい、宮さん。」

僕も水飲みたいけど、アレ怪し過ぎるよ。

喋るは手品で何か出すわ。

考えた方が」

上司の制止を振り切り、水しか目に入らないに近づく私は、アレがニヤリと笑うのに気がつかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4723s/>

（株）ふない不動産

2011年9月9日00時07分発行